

仕事がつらい

ときに

読む

仏教の言葉

光澤裕頭

ブッダも親鸞も「仕事」に悩んでいた!?

サラリーマン僧侶にしてお坊さんマンガ家が

仏教 2500 年の歴史と伝統をもとに

あなたの悩みに
仏教で答えます!

仕事がつらいときに読む
仏教の言葉

光澤裕顕

星海社

231



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

この本を手にとつてくださったあなたは、日々の生活の中、特に仕事で何らかの生きづらさを抱えておられることかと思えます。

「働く」ことについて、ここ数年はネガティブな言葉で語られることが増えたように感じます。報道やSNSの投稿を見ると社畜・ブラック企業・ハラスメント等々、生きづらさを抱える人々の叫びで溢あふれています。私たちの置かれている環境が非常に厳しいものになっていることの表れでしょう。実際、仕事は心身ともにクタクタになる上、理不尽なことも我慢せねばなりません。当然、不満だつてたまつていきます。

私も親しい友人から仕事や働くことに対する行き場のないモヤモヤを聞くことがあります。僧侶として本山に勤める私自身も仕事に対して悩んでいる人間の一人ですから、働く人間として自問自答を繰り返します。

「働くことは〈不幸〉なことではなかったはず。我々は仕事からたくさんのことを学び、生の礎を築いている。それなのになぜこんなにもつらいのか」

しかし、これらの悩みは今に始まったことではないのです。

ブツダは私たちの悩みには根本的な原因があると考えました。状況が変わったとしても、悩みが生じる原因には共通するポイントが隠れているのです。仏教はこの苦悩の根っこを見つめ直すことが一つの大きなテーマとなっています。

例えば、優れた教えの数々を残し、それを人々に伝えた仏教の高僧たち。後の世を生きる私たちの目には、歴史のスターであり華々しい人生を歩んでいたように映ることでしょう。しかし、当時の記述を紐解けば、そんな高僧たちもトラブルに直面しさまざまな悩みを抱えていたことが如実に語られています。ある者は「僧侶」の使命に葛藤し、ある者は師弟関係に苦心し、またある者は自分の信じる道を疑い……と、現代の私たちが抱える悩みと通じる部分が多々あります。しかし、翻せばそれらの苦悩が仏教を机上の論理ではなく、時代に応じて人々に働く生きた教えとさせる契機になり、より深めることとなりました。

そう、高僧の輝かしい足跡は苦悩した証であり、時代を超えて私たちにとっても非常に有益なヒントを導いてくれるのです。

仏教の物語

本書は「仕事」の中で私たちが抱える具体的な悩みを取り上げるとともに、それぞれテーマに沿った仏教所縁の物語を取り上げ、悩みに対する解決方法を仏教の視点で考察しました。

物語は「ジャータカ」や「うじしゅうい宇治拾遺物語」「にほんりょうい日本霊異記」を中心に働く私たちに刺さるものを筆者がピックアップしています。「ジャータカ」はあまりなじみがないかもしれませんが、「ほんしやうたん本生譚」とも呼ばれ、しやくお釈迦さまの前世を語る物語です。お釈迦さまは王であったり、猿や鹿などの動物であったりと実にユニークで、さまざまな国でむかしから大切に語り継がれてきました。

この「ジャータカ」に代表されるように、仏教の物語では人や動物が神仏とともに活き活きと動き回り、身に沁みるオチが教えをより印象深く表現しています。中には幼いころ大人から読み聞かせをもらった昔話のような懐かしさを感じるものがあるかもしれま

せん。実際、これらの物語の中には「昔話」として読み継がれているものも多いのです。

物語の持つ力は空想（フィクション）にとどまりません。読者はキャラクターと心の中で一体化し、他者の経験を追体験することができます。それゆえに、登場人物に危機が迫れば手に汗を握りますし、別れがあれば涙するのです。時として、キャラクターが最良の理解者となることもあります。改めて私が申すまでもありませんが、物語は魅力的で我々の心を動かす力があり、人々に「伝える」手段としてメッセージとともに語られています。

仏教も物語とともに語られてきました。「ジャータカ」のようにブッダの教えを物語で表現することにより、難解な教義を頭の中だけの知識としてではなく、感覚的に伝えることができます。仏教の物語はときに娯楽として人々の心を楽しみで満たし、仏教のメッセージを潜在的に伝え続けています。

本書ではそんな仏教の物語を、僧侶でありマンガ家でもある私が仏教とも縁が深いマンガにして執筆いたしました。今日では、もはや文化の域に達したマンガですが、一説ではそのルーツは高山寺に伝わる「鳥獣人物戯画」だと言われています。作者は僧侶の鳥羽僧正覚猷（かくゆう一〇五三〜一二四〇）と伝えられています。不明な点も多いようです。

確かに「鳥獣人物戯画」を見ると動物たちがキャラクターのごとく楽しげに描かれてお

り、現代のマンガやアニメに通ずる表現を感じる事ができます。しかし、私はマンガのルートやマンガと僧侶の関わりは「鳥獣人物戯画」にとどまらないと思っています。例えば、江戸時代には仙厓義梵せんがいぎぼんという僧侶が今日で言うところの「ヘタウマ」タッチの絵師として名を馳はせていましたし、彼ら以外にも有名無名を問わずたくさん僧侶が絵や物語を用いて表現をしてきました。

僧侶はその境遇から、人の生死や善悪をまじまじと見つめる機会が多かったのでしょう。仏道を歩み人々に仏法を説きつつも、娑婆しゃばの世で見え隠れする人間の無常や業の深さを儚み、のびのびとした線にチクリと皮肉を効かせる。私はこのような僧侶たちの精神そのものにマンガのルーツを感じるのです。

本書に込めた願い

マンガのパートは物語の魅力と本質を損ねぬよう留意しつつ「楽しく」を意識して執筆いたしました。仕事で疲れているとき、もうひと頑張りする前に、私たちに必要なのは緊張をほぐしてくれる心の栄養です。心の栄養は笑顔から、まずは純粹に物語を楽しんでいただきたいと思います。「ゲラゲラ」とはならなくとも、「クスッ」としていただければ、

マンガ家としてはニンマリです。

次にテキストのパートでは私自身の経験を踏まえ、仏教の言葉を用いて文章を綴りました。目の前に生きづらさを感じている「あなた」を想像して、できうる限りの言葉を尽くしたつもりです。自分自身も苦悩する現代人として仏教に触れ、私自身が励まされた言葉やエピソードを選んでみました。どの仕事もご縁によるものであり、本来それは優劣を競い合うものではなく支え合うものです。あなたが仏教に出会い、そして抱えている「つらさ」が少しでも和らいでくれれば、僧侶としてこれ以上に嬉しいことはありません。

最後に、それぞれの物語はマンガ化するにあたり、筆者が若干脚色を加えている部分があります。また、一口に「仏教」と言ってもその世界観はあまりに深く、僧侶である私自身もまだまだ未熟で勉強中の身の上です。ですから、本書における仏教の言葉や解釈は筆者自身が出会い、筆者の言葉で語られている部分が多々ございます。その点は何卒ご理解いただきたく思います。



はじめに 3

第 1 章

環境の変化

17

1 新しい環境に戸惑ったとき 19

ジャータカ「スタナと人喰い夜叉」 20

「新しい環境」とは 24

仏教が「新しい環境」だったとき 27

夜叉と青年 仏教の歴史からどのような視座を得るのか 30

新しい環境（どんな環境）でも変わらずに大切なこと 32

2 一生懸命学ばなくてはいけないうとき 37

ジャータカ「カラスと孔雀」 38

たくさんの人が学ぶ世の中で 42

私たちはなぜ学ぶのか——「自力」の学びと「他力」の学び—— 44

仏教の視点から考える学ぶことの最大の恩恵とは 47

学ぶことの本質とは 51

第2章 働くというとき 53

1 大きな仕事を任されて緊張したとき 55

日本霊異記「法華経に変身した魚」 56

大きな仕事とは 60

一番の大仕事とは 62

誰が魚を『法華経』に変えたのか 66

「大きな仕事」をしていますか 68

2 何かを成し遂げて自信過剰になってしまったとき 71

ジャータカ「イノシシとライオン」 72

成功の喜び 76

長続きしない「有頂天」 77

なぜ「有頂天」になってしまうのか 79

有頂天とは異なる極楽浄土 80

自信過剰という色に染まらないためには 82

第3章 くじけそうなとき 85

1 失敗して落ち込んでしまったとき 87

日本靈異記「焼けない不可思議な仏画」 88

「人は誰しも失敗を経験して成長する」とは言っても……。 92

阿弥陀仏の救済 93

阿弥陀仏による救いは現代人にも有効なのか 96

仏の世界観は「失敗」で終わらない 99

2 誰かに謝らなければならぬとき 103

宇治拾遺物語「留志長者のこと」 104

古今東西人間は謝ってきた 108

謝ることは難しい 111

罪を恥じること 115

誰かに謝らなければならぬとき 117

第4章 人間関係

119

1 上司に不満があるとき 121

ジャータカ「思い上がったジャツカル」 122

お坊さんの社会 126

仏教界きつての悪役(?) デーヴァダッタ (提婆達多) 128

上司への不満は「大人」の涙 132

不満を問いとす 134

2 人の上に立つとき 137

宇治拾遺物語「鼻長き僧のこと」 138

誰でもいつかくる「人の上に立つとき」 142

お坊さんたちの上下関係 143

ともがらを敬う 148

第5章
次のスタートへ

151

1 今のままの自分でいいのか不安になったとき

153

ジャータカ「キンスカの木」 154

目指す「自分」とは 158

「自分」という事象の生まれるとき 159

「自分」を作る「ところ」と「我」 161

自己の探求への旅路 164

2 新しく挑戦をするとき 167

ジャータカ「月とウサギ」 168

「月とウサギ」の物語 172

「自分の時間」に執着する私たち 174

時間を布施したウサギ 176

「自分の時間」という考え方を超えていく 178

いま仏教には何ができるのか 181

参考文献
184

私たちは一人で生きていくわけではなく、常に周囲の環境に影響されながら日々を過ごしています。

仏教ではこれを昔から「縁起の法」と呼んで考察してきました。

第1章1節では、仕事の中で出会う就職や異動、転職や独立といった環境の変化に戸惑ったときの心構えを、「人どのトラブルを避けるには周囲とどう付き合えばいいのか」を

二五〇〇年前から模索してきた仏教に学びます。

2節では、私たちが主体的に環境を変える契機である「学び」について、

古来から悟りのための学びを探究してきた仏教の考え方を見ていきます。

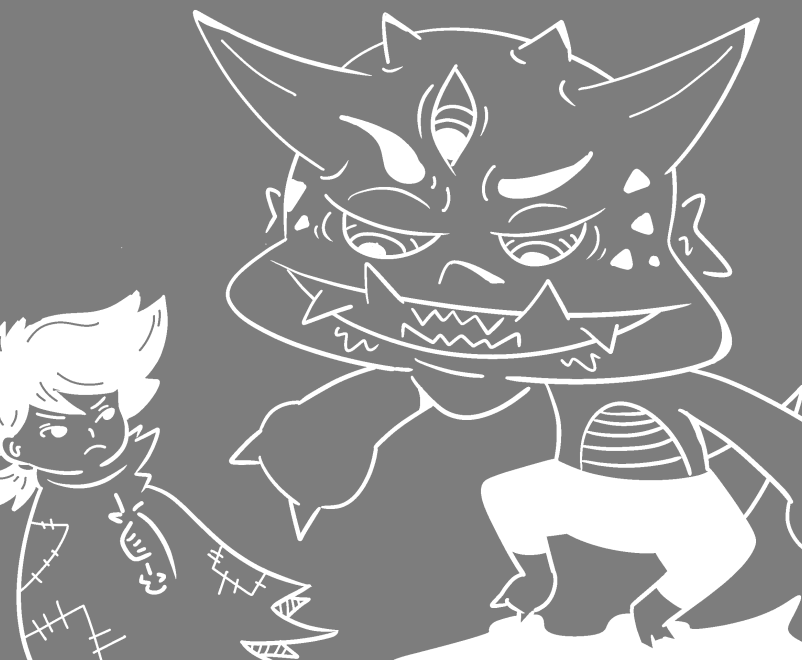
第1章

環境の変化

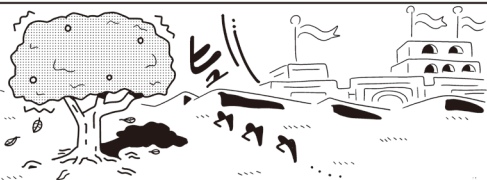
1

新しい環境に
戸惑ったとき

ジャータカ「スタナと人喰い夜叉」

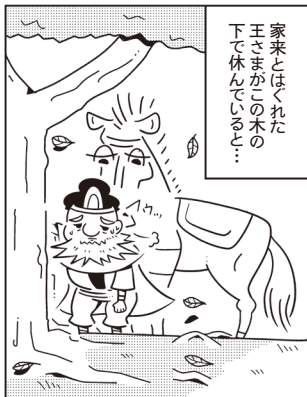


とある国の外に
夜叉が住むという



一本の木が
ありました

家来とはぐれた
王さまがこの木の
下で休んでいると…



まてまて
私は王さま
だぞ！

関係ない
毘沙門天から

木の下に立つ人を
喰っていいと
許されているのだ！



まてくれ！

もつと
美味い人を
用意する！

だから私は
見逃してくれ！

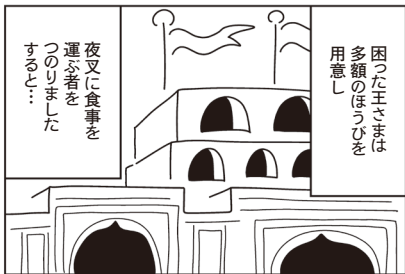


よからう！
しかし

約束を
やぶつたら
お前を喰って
やるからな！

困った王さまは
多額のほうびを
用意し

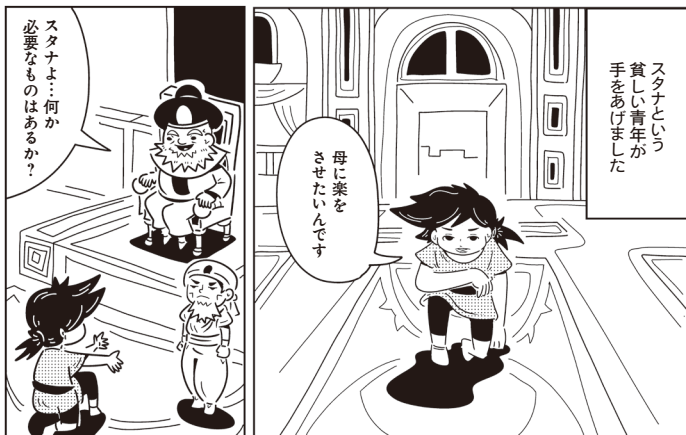
夜叉に食事を
運ぶ者を
つりました
すると…



スタナという
貧しい青年が
手をあげました

母に薬を
させたいんです

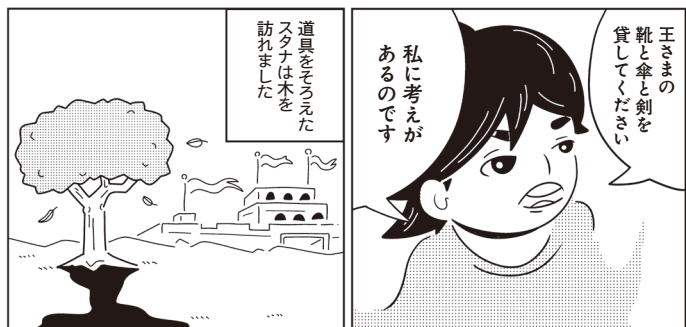
スタナよ：何か
必要なものはあるか？



王さまの
靴と傘と剣を
貸してください

私に考えが
あるのです

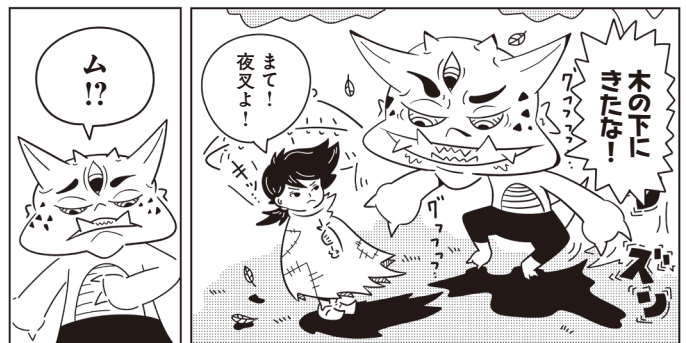
道具をそろえた
スタナは木を
訪れました

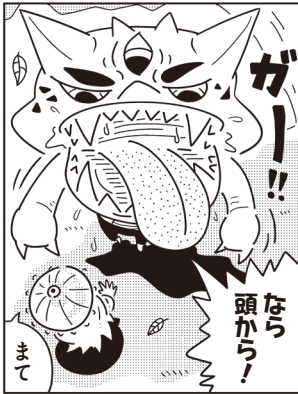


木の下に
きたな！

まて！
夜叉よ！

ム！
!?





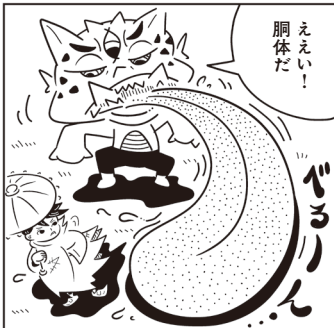
ガァー!!
なら
頭から!

まで



私は靴の上に
立っているのだ

木の下に立って
いるのではない



ええい!
胴体だ

げん

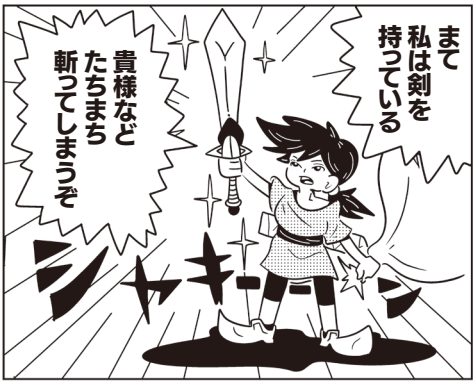


私は傘の影に
入っているのだ

木の影に
入っているのでは
ない



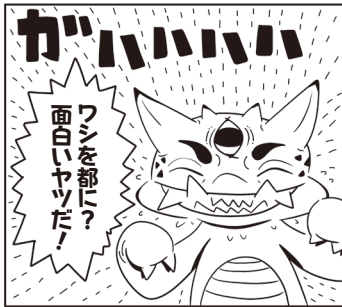
フフフ



まで
私は剣を
持っている

貴様など
たちまち
斬ってしまうぞ

シキキ



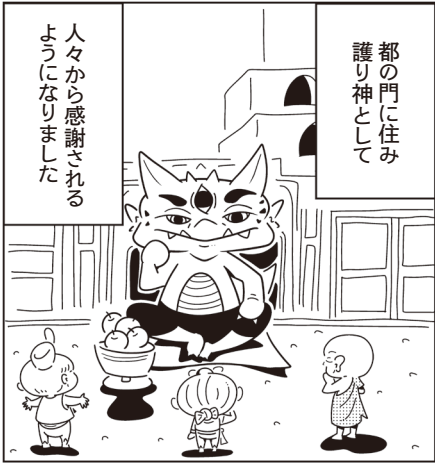
かかかかか

ワシを都に?
面白いヤツだ!



夜叉よ
ここで人を
襲っていても
地獄に
おちるだけだ

どうだ
私とともに
都にこないか?

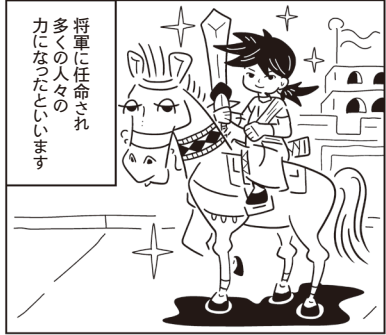


人々から感謝される
ようになりました

都の門に住み
護り神として



スタナがすっかり
気に入った夜叉は



将軍に任命され
多くの人々の
力になったといえます



スタナは
知恵と勇気が
認められ

よくおつて
くれた!

「新しい環境」とは

働く人間に訪れる「新しい環境」にはどのようなシチュエーションがあるのでしょうか。まずは何と言っても就職。社会人として第一歩を踏み出す瞬間です。そして、働き出すと訪れるのが異動や転勤。同じ会社でもこれまでとは全く違う環境になる場合がありますね。最近よく聞くのが、転職や独立。昨今ではスキルを積んで環境を変えることは特別ではありません。誰しも一度は考えたことがあるのではないのでしょうか。

これらはいずれも自分の状況が変化して起こる主体的な「新しい環境」です。他には、例えば「新しい上司が来た」や「仲の良かった同僚が転勤や退職等で職場から離れてしまう」など、周りの状況が変化したため、間接的に「新しい環境」となることもあり得ます。

私の職場も毎年新しい仲間を迎えています。学校を卒業したばかりの社会人の方もいれば、別の部署から異動してきた方、縁あって全く異なる世界から転職された方など、背景はさまざまです。

とある同僚は、最初こそ私との関係に戸惑っていたものの、やがて非常に打ち解けるようになりました。彼は縁あってこの職場にやってきた転職組で、立場こそ私の方が上役で

したが、私よりも年上で社会経験も豊富な方でした。そんな背景もあって私も戸惑っていたのでしよう。しかし、しばらくして、「Jリーグ観戦」という共通の趣味があることがわかり、^{ひいき}鼻根のチームについて熱く語り合う仲になりました。

そんな同僚は退職する際に、正直に初対面の感想を話してくれました。

「光澤さんのこと、最初は真面目すぎる人だと思っていて、こんなに話す仲になるとは思わなかったです」

もし、初めからお互いのことをもっと知っていたら、最初の戸惑いはなかったのかなと思います。

新しい環境とは、時に私たちに緊張やストレスを強いるものです。新しい人間関係の中で新しい仕事を覚えなくてはならないし、場合によっては住む場所も変わっているかもしれません。何もかもがこれまでと違う環境では誰しもが戸惑うことでしょう。そんなとき、新しい環境に慣れるまで、私たちはどのように振る舞えば良いのでしょうか。

当たり前のことですが、私たちは一人で働くことはできません。働くことは常に外の環境と接しており、人々は周囲の状況に大きく左右されます。また、視点を入れ替えれば、

あなた自身も「働く人の外部環境」そのものであるとも言えるでしょう。働く人々は、自分を取り巻く環境に影響されつつ、また、影響を与えてもいます。

このように物事が相互の関係で成り立っていることを仏教では「縁起の法」と呼びます。あらゆる事象は因縁によって起こり、互いに関係しあっているということです。私たちにとっては「縁起」より「縁」と言った方がなじみ深いでしょうか。この言葉は仏教の枠組みを超え、ビジネスや日常の会話でも頻繁に使われています。当然、「新しい環境」も縁によって起こることになります。

考えてみれば物事は全て「新しいこと」だったはずですが。日々の生活に欠かせない習慣や毎日している仕事も、初めてのときはやはり戸惑ったのではないのでしょうか。当たり前になると、そのときのことを忘れてしまっと思って思い返すことはほとんどありません。私たちの「普段の環境」は慣れて日常に溶け込んだ「新しかったもの」に囲まれている状態です。もちろん、それは仏教も同じです。今日でこそ、仏教は歴史や伝統のイメージがすっかり定着していますが、最初から「昔からあったもの」だったのではありません。始まりは一人の修行者が唱えた新しい考え方でした。

仏教が「新しい環境」だったとき

仏教の源流は約二五〇〇年前のインド周辺に見ることが出来ます。歴史の表舞台にある日突然、仏教が出現したわけではありません。仏教もまた縁に導かれるように生まれる土壌があったのです。

仏教誕生以前の古代インドは自然を神々と崇め、部族の繁栄を願う「ヴェーダ」の宗教が中心で、儀式を執行する司祭階級のバラモンが大きな力を有していました。時代が進むと、強力な部族が王国を築くようになり、都市間の交易が盛んになりました。すると、武力によって多くの人々を従える王族や、交易で富を得た商人の力がだんだんと強くなり、相対的にバラモンと「ヴェーダ」の力が低下していくこととなったのです。また、もともと「ヴェーダ」の宗教は部族の秩序と繁栄を目的としたものであり、個人の人生の悩みに答えるものではありませんでした。

これらのことを背景に新たな道を求める人々が現れ、それまでの伝統に縛られない動きが盛んになりました。彼らは沙門しゃもんと呼ばれ、人々が抱える根源的な「苦」から解放される道を求めて活発に活動していました。

ブッダもそのような沙門の一人です。ブッダは「苦」が起こる原因を先の「縁起の法」

によって明らかにしました。私たちが何か苦痛やストレスを感じたとき、それは降って湧いたことではなく、必ず生じる原因があります。この原因を順番に確かめ、最も根本的な要因を取り除くことによって、苦しみを完全に滅することができるとブッダは説きました。そして根本の原因こそ、煩惱ぼんのうに支配される私たちの心だという結論にたどり着きました。今ではおなじみの「縁」も当時では目が覚めるような発見だったのでしょう。

その後、ブッダはインドのあちこちを周りながら教えを説き、やがて多くの弟子を抱え教団となり、その勢力を拡大させていきます。そして、ブッダが活躍した時代から時はめぐり、仏教は中国に伝わり、日本にも大陸を経由して「新しい宗教」として伝来することとなるのです。

もちろん、「新しい」ものとして伝来した仏教が最初からすんなりと受け入れられたわけではありません。今日のように、仏教が当たり前になるまでには多くの時間とたくさん



人々の努力がありました。

例えばその一端は「お経」から読み取ることができます。もともと「お経」は弟子たちがブツダの教えをまとめて文字にしたものです。ですから、最初の「お経」は古代のインドの言葉で書かれていました。それが中国大陸に渡り、現地の言葉に翻訳されます。そして、翻訳された「お経」が日本に伝来したのです。読経のときは漢文のまま用いることが多いですが、日本語に訳したものや、解説したものがたくさん書かれています。

この翻訳の作業は並大抵のものではなかったはずですが、単純に辞書を引きながら、単語に訳を当てはめていく……とはいきません。思想や信仰を訳すのですから、ピツタリと当てはまる言葉が存在しない場合もあります。世紀の大仕事といえる大変な偉業です。

私はこの翻訳作業が、仏教がその土地の考え方や伝統を取り込む一つのきっかけになったのではないかと考えています。それに加えて、相手の考えをリスペクトし融和する姿勢が仏教の多様性を深め、さらに広げていったのです。

「和顔愛語」という言葉がありますように、仏教が人々の信頼を獲得できたのは思想を押し付けるのではなく、相手とともに関係しあっていたから。つまり、仏教が仏教を実践していたからこそ、「新しい環境」にも溶け込んでいったのです。

夜叉と青年 仏教の歴史からどのような視座を得るのか

さて、では「新しい環境」に対する戸惑いを生み出している原因とは一体何でしょうか。それは、主体と環境の間に起こる摩擦です。

新しい職場で戸惑うのは、今まで別の環境で仕事をしていた「我」が、違う違う、と主張しているからです。我々はみな、過去があつて今があります。ですから、その経験がある分、自我が強くなつてしまいます。「新しい環境」に溶け込むためには、私たち自身がそれまでの経験によつて形成された自分に執着する「我」を意識して見つめ直す必要があるのです。

冒頭の物語にも「新しい環境」に挑戦した人物がいます。夜叉に智恵と勇気で挑んだ青年・スタナです。スタナは非常に貧しい青年でしたが、母親を養うために危険な挑戦に臨み、見事幸せを掴み取りました。

そして、もう一人環境が大きく変わった登場人物がいます。そう、夜叉です。物語上の構造ではスタナが「主人公」で夜



又はスタナを引き立てる「悪役」になるでしょうが、よく読んでみると、夜叉からも学ぶことが非常に多いことに気づかれます。夜叉は人喰いとしての「我」を見つめ直し、「新しい環境」を受け入れたのです。物語終盤の夜叉は、恐ろしい人喰いの怪物ではなく、都の頼もしい護り神でした。その結果、王さまも、スタナも、母親も、そして夜叉や都の人々も、みんなが「新しい環境」の中で幸せになったのです。この結末をもたらしたのもこそ、物語のテーマである「菩薩の行い」です。

仏教ではその具体的なものとして次のような行いが挙げられています。

- ① 布施……ほどこしを行う
- ② 持戒……決まりごとを守る
- ③ 忍辱……苦難に耐え忍ぶ
- ④ 精進……たゆまぬ努力
- ⑤ 禅定……心を落ち着かせる
- ⑥ 智慧……ものごとを正しく認識する

これらの行いは「波羅蜜」という具体的な実践方法になります。六つの「波羅蜜」(実践)ですので「六波羅蜜」と呼ばれています。冒頭のマンガでも、登場人物たちが実際に行っていました。

「波羅蜜」とはサンスクリット語(古代のインドの言葉)の「パーラミター」の音写語です。仏教では度々このように音写語が用いられています。一例を挙げると、「般若」は「パニヤー」、「阿弥陀」は「アマターバ」の音に漢字を当てたものです。

先に翻訳の偉業についても触れましたが、別の国の言葉を訳して、それが何千年も大切にされているということは、国や時代が変わっても、その考え方は多くの人々の支えとなっているということの証明でもあるわけです。

新しい環境(どんな環境)でも変わらずに大切なこと

新しい環境でうまくいっていないとき、ひよっとしたら新しい環境に飛び込んだことを後悔するかもしれません。しかし、悲観することはありません。あなたがその場にいるということは、他ならぬ「縁」による導きなのです。「縁」というのは不可思議なもので、必ずしもあなたにとって心地良い環境を与えてくれるものではありません。時として受け入

れがたい現実を突きつけてくる厳しさも合わせ持っているものです。昨今では自分の望むものを頼み込む傾向がありますが、それは「縁」ではなくあなたの「我」を深める自分の都合というものです。

「楽かつらいか」は物事の意味を決める指針ではありません。まずは、「新しい環境」それ自体が縁によるもので、出会うべくしてその環境に出会っているのだと気がつくところが第一歩になります。基本的に私たちは変化を嫌うもの。しかし、「習慣は第二の天性なり」という格言があるように、やがて習慣化することによって困難なことも達成できるようになるのです。これは私たちが持っている大きな力。「新しい環境」に慣れたときは、すなわち一つ成長した証と言えましょう。

そして、「新しい環境」で気負って好かれようとする必要もありませんし、強がる必要もありません。そのときに何か特別に意識するのではなく、普段の生活こそ行いを意識するための時間なのです。これについては、僧侶同士で修行について話をしていたときの、あのお坊さんの言葉が非常に印象に残っています。

「修行は『行いを修める』と書く。極度に心身を追い込むことをイメージするが、毎日

続けることが重要で続けてこそ意味を成す。そして、同時に毎日続けることは困難なことでもある」

先ほど、具体的な実践方法として「六波羅蜜」をご紹介しましたが、これは一度するだけではあまり効果がありません。一つ一つは特別難しい行いではありませんが、日常生活の中で、日々心がけることで、しっかりと心に根付き振る舞いとして表れてきます。

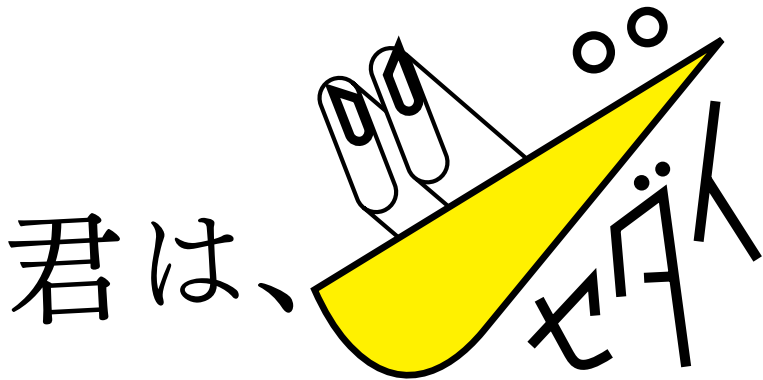
「普段の環境」であつても実際のところ、全く同じことが続くことはあり得ません。私たちは絶えず変化しており、毎日少なからず「新しい環境」の連続です。

仏教ではこのように刻々と変化する「諸行無常」の中で、変化を拒むのではなく、変わることを受け止める心のあり方に重きをおき、実践として体系化されてきました。これから臨むためにはこれまで大事にしていたことを変わらずに大切にすること、「新しい環境」の準備期間は今このときの「普段の環境」にこそポイントがあります。一度きりの厳しい修行よりも、ささやかでも大切なことを何日も続ける方が、いざというときに力になるのです。

最後に、私たちは物事を考えるときに、その主体は「自分」になりがちです。しかし、

例えばあなたが新しい職場で働くことになったとしましょう。あなたにとっては職場という「新しい環境」に踏み出すことになりますし、受け入れる側もあなたという新しいメンバーを迎え、昨日とは違う「新しい環境」になります。これからどのように関係を作っていくのか試行錯誤をするのはお互い様ですね。

「新しい環境」をより良いものにするためには、当事者だけではなく、受容する側も一緒に作っていくかねばなりません。「環境」は作る側と作られる側がいるものではなく、お互いに関係しあって築かれるものだからです。新しく来た人にだけ成長を求めるのではなく、受け入れる側もしっかりと変わっていくかといけません。それこそ、「和顔愛語」の姿勢でにこやかに変化を楽しむぐらいのゆとりを持ちましょう。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ
ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!